

特別企画・若手ゼミ設立まで

## 「若手哲学ゼミ」二五周年に寄せて

吉田 傑俊

「若手哲学ゼミ」が二五周年を迎えることに、まず心からお祝いを述べたいと思います。ところで、この機会に、創立発起人のひとりとして私にも、何か「思い出」を書くようにとの要請が今年度のゼミ世話人の方からありました。二五年もたてば記憶も薄れてくるのもやむをえない話です。ゼミ創立時のかすかな記憶をたどり、いくらかの私なりの感慨にも触れて、責をふせがせていただきます。

このゼミの創立の意図や準備過程については、創立二五周年の本号に、石井伸男さんが「若手ゼミ」創立のころ」という一文で詳しく書かれています。そこに書かれているように、このゼミの最初の「仕掛人」は石井さん（当時、都立大院生）と吉田千秋

さん（同、名古屋大院生）でした。ゼミを全国的なものにしようという意図もあり、お二人から、北海道の村山紀昭さん（同、北海道教育大）、京都の向井俊彦さん（同、京大院生）や私（同、鹿児島大）にも話があり、一九七二年の一二月暮れに京大前の喫茶店「駸々堂」で、村山さんを除く四人が会合したのが出発となりました。話の中心は、当然ながら、ゼミの性格をどのようなものにするかということでした。そして、結論として、現在もなおこのゼミの骨格をなしているはずの、若手哲学研究者の研究の自由な交流の場とすること、ゼミの継続は自動的にせず参加者の意思によって次回開催を決めること、などを確認したのでした。

この確認は、まさに若手ゼミにふさわしい「自由」かつ「民主的」なものであり、ゼミが今日まで継続されているのもこの確認によるものと、私自身は確信しています。もっとも、この確認は、長時間の議論の末のものでした。集まった四人が主として唯物論を研究していたこともあり、ゼミの柱を唯物論研究にすればという意見も出ました。木枯らしの吹く

寒い日の午後、学生時代に千秋さんらと研究会のねじろとしてよく利用していた駿々堂でえんえんと議論し、さらに大阪の実家に場所を移しお酒を酌みつつ徹夜近くまで話を継続したのを記憶しています。その後も、先の五名が呼びかけ文の作成や配布に取り組み、翌年七月の湯川原での第一回ゼミを迎えたのでした。会場へ向かうバスの停留所で、はじめて会ったはずの中村行秀さんに「ああ、あなたが吉田さんでしたか」といまでも変わらぬ気さくな調子で話しかけられたとき、このゼミはたぶん成功するなと感じたのを妙に覚えています。

さて、先にあるようにこのゼミの発案者は石井、吉田千秋の両氏ですが、それは両氏がかつてある雑誌に「日本哲学会」についての学会展望（一九七一年）を書いたのが機縁でした。いま念のため頁をめぐってみると、以下のような指摘があります。学会の現状は「解釈主義の横行、『反乱』の哲学と現状離脱、夢想の哲学への二極分解傾向」など「哲学の現実化」にはほど遠い。ゆえに、「マルクス主義哲学」や、「とりわけ全国の若手哲学研究者は哲学会の老

化現象を打開する役割を期待される」と。若手ゼミは、少なくともその発足の契機としては、このコンテキストを背景にしたと思います。あれから四半世紀、問題は、日本の哲学会が進展したか否かです。規準を高くすればいまだ悲観的な見方が多数かもしませんが、私個人としては、全体としては少しずつであれ進展したのではないかという印象を持ちます。たとえば、現在の「唯物論研究協会」の中心的メンバーとして、さらには少数ですが「日本哲学会」の委員としても、若手ゼミ出身者の多くがすでに中堅として活躍しています。そして、私自身も含むこうした人たちが、哲学研究に必須な自由と民主の精神をこのゼミで養ったことは否定しえないところであります。したがって、若手ゼミは日本の哲学会の進展に当初の予想以上に貢献してきたし今後もしゆくだろうというのが、私の小さくない実感であり大きな期待でもあります。

（よしだ　すぐとし　法政大学）